

Title	国会図書館蔵『中庸問書』について
Author(s)	池田, 光子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 42 P.1-P.16
Issue Date	2008-12-25
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/5066
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

国会図書館蔵『中庸聞書』について

池 田 光 子

懷徳堂は、江戸期に隆盛を誇った大坂の官許学問所である。明治二年（一八六九）に閉校するが、関連資料の多くは、大阪大学附属図書館懷徳堂文庫に保管されている。懷徳堂文庫以外にも関連資料は存在するが、これらの資料の内、詳細な検討を加えられているものは少ない。本稿で取り上げる『中庸聞書』も、その一つである。

『中庸聞書』は、国会図書館所蔵の資料であり、書名に「聞書」の語が入った一連の著作の一つである。これら一連の著作は、国会図書館の目録によると、懷徳堂を代表する儒者の一人である中井履軒（一七三二～一八一七）の講義録と記載されている。『中庸聞書』も、やはり履軒の講義録とされているが、実際には講義者及び筆記者は記されておらず、履軒の講義録とするには不確かな資料である。

本稿は、各種「聞書」の中から『中庸聞書』に焦点を絞り、講義者の問題も視野に入れつつ、考察を加えていくことを目的とする。なお、漢字については旧字体・異体字を常用漢字に改め、「こ」「扌」「㇀」は、それぞれ「ナリ」「ドモ」「コト」とし、「メ」は文意に合わせて仮名に改めた。

一・懷徳堂の中庸錯簡説

懷徳堂の初代学主である三宅石庵（一六六五〜一七三〇）の学説の一つに、「中庸錯簡の説」がある。これは、朱子が定めた『中庸章句』全三十三章のうち、本来第十六章は第二十四章の後にあったとする学説である。

『中庸』第十六章は、「鬼神」を論じた章である。伊藤仁斎（一六二七〜一七〇五）は、孔子が怪力乱神を語らなかつたことなどを根拠として、第十六章以下を『中庸』の原文ではないとして排除した。対して懷徳堂は、「誠」の概念が『中庸』の主軸であることを基盤として解釈を試み、第二十章以前の主題を「中」、第二十章以降の主題が「誠」とする。その上で、仁斎が問題としていた第十六章には、一度であるが「誠」の字が登場していることから、「誠」が頻出するようになる第二十章以降にあつたはずであるとする。併せて、「鬼神」の語が第十六章に記されているから、第二十章以降でも、「神」の字が登場する第二十四章の後ろに置くべきとした。⁽¹⁾

この学説は当時より高く評価され、四代学主中井竹山（一七三〇〜一八〇四）は、石庵の学説の中でも特筆すべき成果の一つであるとし、山片蟠桃（一七四八〜一八二二）は『夢の代』の中で、石庵の「卓見」であり「千載の一快」と評した。⁽³⁾そして石庵の説は、竹山へと受け継がれて補充され、『中庸錯簡説』として完成する。⁽⁴⁾こうして、石庵の「中庸錯簡の説」は、懷徳堂の学問を代表する説となった。

時代がくだってもこの学説は広く支持され、西村天四（一八六五〜一九二四）は「千古に不磨」と称し、⁽⁵⁾武内義雄もまた、『中庸』を解するにあたって、懷徳堂の「中庸錯簡の説」を採用しており、現在の『中庸』研究に大きな影響を与えている。⁽⁶⁾

二 『中庸聞書』第十六章

中庸錯簡説は、『中庸聞書』にも反映されている。次に挙げるのは、『中庸聞書』第十五章講義の末尾にあたる箇所であるが、次章の第十六章は錯簡であり、第二十四章の後におくべきであることを明言している。

石菴先生ノ考ヘニ、ツギノ第十六章ノ鬼神ノ一篇ハ、錯簡トシ玉フナリ。竹山先生モ中庸ノ錯簡ヲ正シ玉ヒ、鬼神ノ章ヲ第二十四章ノ「不善必先知_レ之故至誠如_レ神」ノ次ギニアルベシトシ玉フナリ。……錯簡ナルコト、スコシモ無_レ疑_ヒ。故ニ第二十四章ノ次ギニテトクベキナリ。故ニコ、ニテハ鬼神ノ章ヲトカザルナリ。（括弧及び句読点、傍点は筆者による。以下同じ。）

石庵と竹山との名を挙げ、中庸錯簡説を主張しているのだから、少なくとも『中庸聞書』の講義者が懷徳堂の学問に触れた人物であることは間違いない。引用箇所の末尾に「故ニコ、ニテハ鬼神ノ章ヲトカザルナリ」とあるが、この個所で説かないとされている「鬼神ノ章」とは、第十六章のことである。

講義者は、この第十六章「鬼神ノ章」に入ると、これまでの口調と異なり、「鬼神」の語に敏感に反応して解釈を施している。その解釈は、次に挙げるとおりである。なお、便宜上、引用順に番号を付し、引用文末の括弧内には、講義に対応する第十六章の経文、または朱子注を示しておく。

1上ニハ、ヒロク天下造化ノ鬼神ヲ云ヒ、コ、ニハ、人ノ祭ル先祖ノ鬼神ヲ以テ云フトナリ。此ノ説非ナリ。

上ノ章モスベテ皆ナ先祖ノ鬼神ノコトヲ云ヒ玉フナリ。(經文「齊明盛服」)

2 人ト畏レツ、シミテ、祭祀ヲサ、ゲ行ヘバ、洋、乎トタツプリトシテ其ノ祭ル所ノ鬼神、其ノ上ニゲンザイゴザル如クトナリ。是レ先祖ノ鬼神ヲカツテ其ノ上ニアリ、左右ニアルト云フヲ以テ、陰陽造化ノ鬼神ノ物ニ体シノコサヌヲ云フトナリ。此ノ説非ナリ。「如シト在ルガ」、如シト云ヘバ、ホンマニアルニアラズ。此ノ方ノ先祖ノ神ヲ大切ニ思フテ誠トヲ十分ニツクシ、誠トユキトク故ニ、其ノ上ミ左右ニ先祖ノ神ノアルガヨウニ思フトナリ。(經文「洋洋乎如在其上」)

3 其ノ祭ル所ノ鬼神、其ノ祭ヲスル者ノ左右ニイマシアルガ如クニテ、陰陽鬼神ノ物ニ体シノコサヌコト、カヨウナ物ノトナリ。此ノ説非ナリ。タゞ先祖ノ神ノ左右ニゴザルヨウニ思フナリ。(經文「如在其左右」)

4 死セシ者ハ、カタチハナケレドモ、ナニヤラ幽霊ノ如クアルヲ云フナリ。悽愴ハ、ゾットスルナリ。此ノ註甚ダ非ナリ。本文ニ「如シト在ルガ」云フ「如」キノ字ヲ可シ味フ。ホンマニアルニアラズ。誠ヲツクスカラ、ドウヤラアルヨウニ思フナリ。(朱子注「焄蒿悽愴」)

5 鬼神陰陽ノ氣ノ屈伸分散、皆ナ誠ト眞実ナリ。鬼神ノ理ノ、ミダリナク、眞実マコトナルノ、ヲ、イカクスコトナラズシテアラハレ、陰陽ノ誠トナル故ニ、如ク此ノアラハレテヲ、ハレズトナリ。此ノ説非ナリ。是

レ祭ル者、先祖ヲ大切ニ思フ心ノ誠ナル故ニ、自然ニ外カニアラハレテ、先祖ノ神ノ上ミ左右ニアルヨウニ思フテ、誠トノヲ、イフタノデケヌコトトナリ。(經文「誠之不可揜如此夫」)

1から5の傍点個所に共通しているのは、「此ノ説(註)非ナリ」という表現である。説や註を「非」と明言しているのは、第十六章個所の講義にのみ見られる特徴である。

講義者がここまで強く否定するのは、「鬼神」に対する他説である。講義者は、「鬼神」を「陰陽」の鬼神とする解釈(資料2・3・5の傍線部)や、「幽霊」のようなものとする解釈(資料4の傍線部)を厳しく斥ける。また、「上ノ章(第二十四章を指す)」は「天下造化」の鬼神、ここでは「陰陽」に通じる鬼神、といったように鬼神を分けて解釈すること(資料1の傍線部)も否定する。

では、講義者の考える「鬼神」とは何か。講義者の考える「鬼神」とは、「先祖ノ(鬼)神」(資料1・2・3・5傍線部)であり、しかもそれは「ホンマニアルニアラズ。誠ヲツクスカラ、ドウヤラルヨウニ思フ」(資料4傍線部)もの、すなわち、存在しているように思いこんでいるだけで本当は実在しないもの、なのである。それ以外の鬼神はありえない、というのが講義者の立場である。これは「無鬼論」に属する思想と言える。

無鬼論は、中庸錯簡説と並び、懷徳堂の思想的特徴の一つである。中庸錯簡説と併せて無鬼論が強く主張されていることを考えると、講義者はやはり懷徳堂の関係者であることが推察されるのであり、ここに示された無鬼論もまた、懷徳堂学問の影響下にあるものと考えられる。

三、「聞書」の講義者

以上に述べたとおり、『中庸聞書』の講義者は、懷徳堂関係者であると推察される。国会図書館の目録どおり履軒が講義者であるならば、この二つの懷徳堂学問の特徴が、講義に反映されていても不思議はない。

しかし、同図書館所蔵で、履軒が講義者とされる他の「聞書」の中には、講義者が履軒である可能性が低いとされる「聞書」もあり、兄の竹山を講義者とする説もある。⁽⁸⁾

竹山・履軒の二者が講義者である可能性を考えてみた場合、『中庸聞書』に関して言うならば、竹山の可能性は低い。それは、前章で掲げた引用文中にあったように、「竹山先生」と尊称している箇所があるからである。もちろん、尊称の有無のみで講義者を決定するのは難しい。清書の段階で筆写者が、講義者である竹山を「先生」と称した可能性も考えられるからである。

そこで、竹山に関する記述に着目して『中庸聞書』を見ていくと、第二十四章経文「至誠の道以て前知するべし」に対して、次の講義が記されている。

此ノ上モナキ聖人ノ至誠ノ道チシカタハ一毫モ私ノ偽リナキ故ニ吉凶禍福ノマダデ、コヌサキニ、前キダツテ吉凶禍福ノアルコトヲチャント知ルトナリ。然レドモ、ナンニモアヤシキコトニアラズ。至誠ノ人ハ、ナントノウ禍福アルコトヲ前知スルナリ。出羽ノ人ニ高山彦九郎ト云フ武勇ノ人アリ。日本中ヲ廻国ス。中井竹山トシタシク交レドモ、竹山、ドウモユルセヌ、ナントノウ心ノヲケル人ジヤト云フテ、一夜モトメザルナリ。シツ

カリト知ルニアラズ。ナントノウ竹山ノ心ニテッスルナリ。後チ果タシテ旅宿ニテ自殺セシナリ。カヨウナコトガ、前知スルナリ。アヤシキコトニアラザルナリ。

経文にある「至誠」と「前知」との関係をも具体的に説明するため、「至誠ノ人」の例として、竹山を出している。ここには竹山に対して「先生」という尊称は付けられていないが、「至誠ノ人」とすることで畏敬の念は十分發揮されている。よってこの記事は、竹山自身によるものとは考えがたい。『中庸聞書』の講義者が竹山ではない理由の一つである。

さて、傍線部には、竹山が「至誠ノ人」であり、「前知」した話が述べられている。講義者の意図としては、「前知」とは予感のようなものであり、決して怪しいことではないことを示そうとして、竹山と高山彦九郎（一七四七～一七九三）との話を挙げたのであろう。竹山は彦九郎と親交があったが、何やら配慮せねばならないような気がするとし、彦九郎の宿泊を許さなかった。

竹山と彦九郎との親交は、中井兄弟を良く知る角田九華の『近世叢語』や頼春水『在津紀事』などの記載から確認される。しかし、ここで紹介されている逸話は、管見の限り『中庸聞書』以外に見つけ至らない。懐徳堂の先賢に関して最も詳しいと思われる『懐徳堂水哉館先哲遺事』にも、確認することはできなかつた。⁹⁾ほかに、他書に確認できないこととして、出身地のことがある。この記事では、彦九郎が出羽の人とされているが、正確には上野の人である。

「シタシク交」わりがあつた人物の出身地を誤っていることも、『中庸聞書』の講義者が竹山とは考えにくいこと

を示唆している。竹山が彦九郎の出身地を誤って述べたと解釈できるかもしれないが、「至誠」のくだりを考えると、そのような解釈は不自然であろう。やはり、講義者は竹山自身ではなく、竹山を尊敬し、竹山の側または竹山のことをよく知る者に親しかった人物であったと考えられる。

では、竹山でなければ履軒であろうか。その可能性も履軒と彦九郎との交流を考えると疑問が生じる。

履軒の著作の一つである『弊帚統編』に、「孝三伝」「卯谷伝」が収められている。この二篇には上野の美談が記されており、彦九郎の影響を受けて作成されたと言われている。⁽¹⁰⁾ここから推測するに、履軒が彦九郎の出身地を失念してしまう可能性はやはり低い。

以上から、「聞書」の講義者として想定されていた竹山・履軒は、『中庸聞書』の講義者として、極めて可能性が低いと判断される。

では、なぜ講義者が履軒とされているのか。

国会図書館所蔵の、選者・講述者を履軒とする「聞書」のうち、『左伝聞書』および『孟子聞書』、『国語聞書』、『論語聞書』の四種は、講義者について検討が加えられている。履軒の講義とされているのは『左伝聞書』と『孟子聞書』⁽¹¹⁾、竹山・履軒が関与した講義とされているのが『論語聞書』⁽¹²⁾、『国語聞書』は履軒が関与していないとされる。⁽¹³⁾

『左伝聞書』と『孟子聞書』とが履軒の講義録とされるのは、履軒が注釈を付した別の『左伝』『孟子』の解釈と、共通点があったことが理由となっている。では『中庸聞書』の場合はどうであろうか。章を改めて考察していきたい。

四 『中庸聞書』と履軒の『中庸』注釈

懷徳堂文庫は、「七経雕題」「七経逢原」と呼ばれる、膨大な経書注釈書群を所蔵・保管している。これらは全て履軒の経書研究の成果であり、長い年月を掛けて作成されたものである。⁽¹⁴⁾『左伝聞書』『孟子聞書』のそれぞれと共通する解釈が見られた履軒の注釈書も、これらの中に含まれている。

もちろん、『中庸』への注釈書も含まれており、それぞれ、『中庸雕題』『中庸逢原』と名づけられている。『中庸雕題略』と『中庸逢原』との巻末には、履軒独自の『中庸』の章立てに順って経文のみを配列した、『中庸水哉館定本』『中庸天楽楼定本』が付されている。⁽¹⁵⁾

それぞれの「定本」の分章に細かな差異はあるが、双方とも第十六章を第二十四章の後ろへと移している点は共通している。履軒もまた、中庸錯簡説を受け継いでいたことは明かである。

だが、中庸錯簡説が反映されているという点で、『中庸聞書』との一致が見られるものの、第十六章以外の履軒独自の分章は、『中庸聞書』に反映されていない。反映されなかった理由はさまざまに推測されよう。例えば、『中庸聞書』が懷徳堂での講義であり、履軒は竹山に遠慮して自説を出さなかったと考えることも可能である。だが、そうした推測に根拠を求めることは困難である。つまり、章の配列から、講義者が履軒であるか否かを判断することは難しい。

そこで、視点を変えて、第十六章の「鬼神」解釈の比較対照を行うことで考察を進めていきたい。この章は、『中庸聞書』の思想的特徴が見られた章である。

「雕題」「雕題略」「逢原」は、この順序で成立しているため、まずは、集大成となる『中庸逢原』第十六章該当箇所を確認する。「天下の人をして斉明盛服し、以て祭祀を承けさせしむ。洋洋として其の上に在るが如く、其の左右に在るが如し」に対して、履軒は次の注釈を付している。

上文は総じて鬼神の理を論ず。此の一節は別に祭祀の鬼神を論ずるなり。其の義は相い緊承せず。物に体し遺すべからざるに据りて此の節を解するを得ず。

「在るが如し」とは、其の実不在なり。説令其れ実在するや、何ぞ「如」の字を用いて為さんや。「洋洋乎」とは、唯だ是れ想像の光景なるのみ。其の実、之を視るも見えざるなり。

波線部に示したように、履軒は「鬼神」を、「其の実不在」で「想像の光景」であり、「見えざる」と定義している。これは、「鬼神」の実在を否定している『中庸聞書』の態度と類似していると言える。

しかし、波線部では、この章での「鬼神」とは〈理論としての鬼神〉と〈祭祀の鬼神〉との二種が存在しているとしており、「上ニハ、ヒロク天下造化ノ鬼神ヲ云ヒ、コ、ニハ、人ノ祭ル先祖ノ鬼神ヲ以テ云フトナリ」を「非ナリ」とする『中庸聞書』の態度とは異なる。

では、『中庸逢原』作成時よりも前段階での論が、『中庸聞書』に述べられているのであろうか。履軒の講義録とされる『左伝聞書』『孟子聞書』が、それぞれの「雕題」「雕題略」の解釈と一致していたことを考えると、その可能性は高い。『中庸雕題』と『中庸雕題略』とは、内容にほぼ異同がないため、ここでは『中庸雕題略』を用いて確認する。¹⁶⁾

「鬼神」とは、本義を以て之を言うなり。人鬼は鬼と為し、外神は神と為す。通じて之を言うに、人鬼も亦た之を神と謂う。但し外神は単だ鬼と称する者無し。是の章の「鬼神」、人鬼・外神を通じて之を混称するなり。（『中庸雕題略』第十六章該当箇所）

鬼神ハ陰陽ト云フコトナリ。……天地ノ間ニ鬼神陰陽ノ氣行ハレテ、万物生ジ、造化行ハル。……然レドモ、此ノ鬼神ハ陰陽ヲ云ヒ玉フニアラズ。古書ニハ、皆先祖ノ神ヲ鬼神ト云フナリ。（『中庸聞書』第十六章該当箇所）

第十六章の経文、「子曰く、鬼神の徳為るや、其れ盛んなるかな」に対する注釈である。ここでの「鬼神」について定義しているのが、各々の傍線部箇所である。『中庸雕題略』は「鬼神」を「人鬼」と「外神」との総称とし、『中庸聞書』は「先祖の神」としている。つまり、両者が定義するところの「鬼神」は、一致していない。

また、『中庸聞書』の傍線部中に「鬼神ハ陰陽ヲ云ヒ玉フニアラズ」とあり、「鬼神」を「陰陽」と連結する考えを否定する言葉がある。『中庸雕題』『中庸雕題略』では確認ができないが、『中庸逢原』には、前掲の経文に続く箇所への注釈で、次に挙げる定義が見られる。

陰陽とは即ち鬼神なり。古え陰陽の語無く、陰陽の運用も亦た之を鬼神と謂うのみ。亦た其の精神の知覚有る者の如きを指しての言なり。（『中庸逢原』第十六章該当箇所）

傍線部から明らかのように、履軒は、「鬼神」を「陰陽」と同意義として定義している。これを敷衍して考えるならば、おそらくは、前掲の『中庸雕題略』にある「本義」とは、「陰陽」を意味しているのであろう。『中庸聞書』は、前掲引用文の冒頭にある「鬼神ハ陰陽ト云フコトナリ」の一文から、一見すると「鬼神」と「陰陽」とを同意義として解釈しているようであるが、傍線個所で「然レドモ、此ノ鬼神ハ陰陽ヲ云ヒ玉フニアラズ」と述べており、「鬼神」と「陰陽」とを明らかに区別している。

「雕題」および「逢原」での「鬼神」解釈と、『中庸聞書』での解釈にこのような差異が見られることは、『中庸聞書』の講義者が、履軒である可能性が低いことを示していると言えよう。

なお、「雕題」類の作成よりも前の段階、つまり、講義時の履軒が若年である仮定も考えられる。しかし、高山彦九郎と竹山との逸話から、『中庸聞書』が彦九郎没後の講義であり、当時既に六十歳を既に越えていた履軒を若年と考えることは難しい。

おわりに

以上、『中庸聞書』の特徴と講義者について、考察を進めてきた。目録には中井履軒が講義者として記載されているが、その可能性は低く、兄である竹山が講義者である可能性も低いことを指摘した。

また、第十六章該当個所の検討を通して、『中庸聞書』が中庸錯簡説を採用し、無鬼論を唱えていたことを指摘した。双方とも懐徳堂学問の代表的な思想である。この二点からすれば、『中庸聞書』の講義者が、懐徳堂という場所や学問に近しい人物であったと推察される。

講義者が懷徳堂関連人物であることは、他書には見られない竹山の逸話が記載されているほか、第三十三章該当個所に見られる「中霽」という部屋の記述からも予測できる。旧懷徳堂の平面図には、講堂の間に隣接して、「中霽」という室が在ったことが記されている⁽¹⁸⁾。堂内についての記述は、講義者が懷徳堂の内部に良く通じていた人物であることを示すのに加え、受講者もまた、懷徳堂の内部に通じていたことを示している。つまり、『中庸聞書』とは、懷徳堂で行われた講義の記録であつたと考えられよう。

以上から推測するに、講義者として連想されるのは懷徳堂最後の教授、並河寒泉（一七九七～一八七九）である。寒泉は、竹山・履軒を尊崇しており、両者の逸話を多く伝え残している。また、その著作である『弁怪』の中で無鬼論を唱えており、その中で歴代の懷徳堂関係者の無鬼論も併記している。更に加えるならば、「聞書」類の中には、「並河」との書き込みが見えるものもある。つまり、寒泉は、『中庸聞書』の講義者としての条件を十分満たしているのである。

『中庸聞書』の講義者が寒泉だとすれば、今後の「聞書」研究は、広く懷徳堂関係者全体に敷衍して考えられるべきであろう。懷徳堂の学問を伝えている人物は、竹山と履軒だけではないのである。

注

- (1) 仁斎の説と懷徳堂の中庸錯簡説との差異については、神林裕子「仁斎の『中庸発揮』と懷徳堂学派の『中庸錯簡説』と」（懷徳堂文庫復刻叢書七『中庸雕題』、懷徳堂・友の会、一九九五年）を参照。
- (2) 『万年先生遺稿』の竹山撰の序文を参照。『万年先生遺稿』は、『懷徳』第十八号（懷徳堂友会、一九四〇年）に、吉田鋭雄拾輯「石菴先生遺稿」として翻刻されている。

- (3) 「鬼神ノ章十六章ニアルハ錯簡ナリ。……万年三宅先生ノ卓見ニテ、コノ章ヲ二十四章ニスレバ前後ヨク連続ストアリシヨリ、五井・中井ノ二先生コレヲトナヘテ、今ノ竹山・履軒ノ両先生ニイタリテソノ説備ハル。……千載ノ一快ト云ベシ」(『夢の代』巻七)
- (4) 『中庸錯簡説』は、『中庸雕題』(懷徳堂文庫復刻叢書七、懷徳堂・友の会、一九九五年)に影印復刻されている。
- (5) 西村天因『懷徳堂考』上巻(一九一〇年)「石庵の学問著述」の項を参照。
- (6) 詳細については、『易と中庸の研究』(『武内義雄全集』巻三所収、角川書店、一九七九年)を参照。なお、武内氏は、仁斎の説も併用している。
- (7) 初代助教の五井蘭州から五代教授の中井碩果までの無鬼論について、最後の教授である並河寒泉が『弁怪』に記録を残している。
- (8) 加地伸行氏は、国会図書館蔵『論語聞書』の講義者を、「中井履軒の『論語逢原』について」(『大阪の都市文化とその産業基盤』共同研究論集第一輯、大阪大学、一九八五年)の中で、履軒だけではなく竹山の可能性もあることを指摘している。
- (9) 履軒の曾孫である中井木菟麻呂(一八五五〜一九四三)が記した書。外祖父である懷徳堂最後の教授並河寒泉(一七九七〜一八七九)から、懷徳堂に関連する逸話を多く聞いており、それらの話も『懷徳堂水哉館先哲遺事』に記されている。懷徳堂研究を行う上で、必読の書の一つであると言えよう。なお、その一部を翻刻したものととして、釜田啓市「中井木菟麻呂『懷徳堂水哉館先哲遺事』巻一・巻二翻刻」(『懷徳堂センター報』二〇〇八、懷徳堂センター、二〇〇八年)がある。
- (10) 西村天因『懷徳堂考』下巻の「竹山の交遊」の項(四十七頁)を参照。なお、『弊帚続編』には、「上毛新村」と地名が記されている。これは、彦九郎の出身地である。
- (11) 加地伸行「懷徳堂文庫所蔵漢籍研究の予備調査」(『大阪の都市文化とその産業基盤』共同研究論集第二輯、大阪大学、一九八六年)
- (12) 加地伸行「中井履軒の『論語逢原』について」(『大阪の都市文化とその産業基盤』共同研究論集第一輯、大阪大学、一九八五年)

- (13) 寺門日出男「中井履軒の『国語』注釈について」(『中国研究集刊』第二十六号、大阪大学中国学会、二〇〇〇年)
- (14) 「七経逢原」の一つである、『古詩逢原』自序を参照。
- (15) 南昌宏「大阪大学懐徳堂文庫所蔵『中庸雕題』 関連諸本」(懐徳堂文庫復刻叢書七『中庸雕題』、懐徳堂・友の会、一九九五年)は、『中庸章句』『中庸水哉館定本』『中庸天楽楼定本』の分章を表にしており、一見して差異を知ることが出来る。
- (16) 履軒は『中庸雕題略』の段階で、第十六章を第十九章とする。
- (17) 原文は以下のとおり。「屋漏ハ中井家ノ中霽ノマドノ如ク、マンナカニアマタリウケアツテ、四方サガリニセシ天窓トナリ、室ノクラキ所ロニテアシキコトラスレバ、屋漏ノアカリトリノ窓ノ所ヘユケバアカキ故ニ、ナニトナクハツカシク思フモノナリ。」
- (18) 中井木菟麻呂「旧懐徳堂平面図」(『懐徳』第九号、懐徳堂堂友会、一九三一年)

〔附記〕

本稿は、第三十六回(平成十九年度)三菱財団法人科学助成(研究代表者・池田光子)による研究成果の一部である。

(文学研究科助教)

摘要

國立國會圖書館藏《中庸聞書》的有關考察

池田 光子

與懷德堂有關的很多貴重資料，都被保存在大阪大學附屬圖書館的懷德堂文庫中。可是，在懷德堂文庫以外，也存在著一些有關懷德堂的資料。對這些資料，至今很少被詳細考察過。本稿的研究對象《中庸聞書》，也被認為是與懷德堂有關，但沒有被加以詳細考察的資料之一。

國會圖書館中，有一系統的題目中含有「聞書」二字的著作，《中庸聞書》是其中之一。書中，中井履軒被作為授課者在目錄上記了下來。然而，已有學者指出，有的「聞書」中，雖然目錄中被記錄以授課者是履軒，但實際上並非履軒。本論文結合授課者的問題，來對《中庸聞書》的思想特徵加以考察。

其結果，會發現《中庸聞書》有以下兩個思想特征。第一，朱子《中庸章句》三十三章中，第十六章被移到了第二十四章後面。第二，對於第十六章的「鬼神」，主張「無鬼論」。上述兩點，均被稱為懷德堂學問的特徵，由此可見，《中庸聞書》的授課者，是與懷德堂有關的人物。

把以上的特徵和履軒著述的其他的《中庸》註釋書（《中庸逢原》，《中庸雕題略》，《中庸雕題》）進行比較對照，就會發現，在前者第十六章移動的特徵上，是相同的。可是，後者的「無鬼論」貫徹始終，比履軒的解釋，更為徹底。可見雙方在解釋上尚有差異。

總之，《中庸聞書》雖然作為履軒的講義的可能性很低，但是，授課者顯然是學習過懷德堂學問的人物，同時，作為其思想的特徵，本書顯然比履軒更為徹底地宣揚了「無鬼論」。

可以說，《中庸聞書》，作為與懷德堂有關的人物的講義錄，是在研究懷德堂的「無鬼論」的展開方面非常重要的書，也是今後在推進懷德堂的研究方面，主要的資料之一。

キーワード：『中庸聞書』，懷德堂，中庸錯簡説，無鬼論，中井履軒